



TITLE:

[書評] 大木康著「馮夢龍「山歌」
の研究 中國明代の通俗歌謡」

AUTHOR(S):

伊藤, 徳子

CITATION:

伊藤, 徳子. [書評] 大木康著「馮夢龍「山歌」の研究 中國明代の通俗歌謡」. 中國文學報 2003, 66: 109-120

ISSUE DATE:

2003-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177925>

RIGHT:

書 評

大木 康著

『馮夢龍『山歌』の研究

——中國明代の通俗歌謠——

(東京大學東洋文化研究所報告)

伊 藤 徳 子

奈良女子大學

本書『馮夢龍『山歌』の研究』の筆者大木康氏は、長年にわたつて通俗文學について研究を重ねてこられた。馮夢龍研究は、その中でも大きな割合を占める。大木氏は、「三言」の編者として知られる馮夢龍をめぐる、その生涯、出版活動、及び思想に關する論考など、様々な視點から論考を公にされてきた。

氏がなぜ馮夢龍に關心を抱いたかについては、その著書

書 評

『明末のはぐれ知識人、馮夢龍と蘇州文化（講談社、一九五五年）』に詳しく述べられている。單に一人物への關心からではない。その關心は、馮夢龍の研究を通して「明末の知識人の生活史・精神史」の「視界が開ける」であろうという大きな構想から發しているのだ。そして、ここに取り上げる『山歌』研究でも、この考えは貫かれている。

本書は『山歌』という書を研究の對象にする。『山歌』とは、一般に中國の民間歌謠のことをいう。（なおこの語については本書第二章第二節において詳しく検討されている。）一方、『山歌』十卷は、明末に馮夢龍が蘇州地方で歌われていた民間歌謠を集めたものである。その影印本は『馮夢龍全集（上海古籍出版社、一九九三年）』第四十二冊に收録されている。

本書『馮夢龍『山歌』の研究——中國明代の通俗歌謠』は、著者の二十年にわたる『山歌』研究が結實した大著である。『山歌』は、發見されてからまだ百年に満たない。故に、先行の論考も限られたものしかなかった。また、『山歌』研究の難點は、その歌詞を正確に讀解することにある。

『山歌』に收録されている歌詞は、四百年近く前の蘇州方言で書かれている。ネイティブスピーカーであれば誰でも讀めるものではない。それを正確に讀解するためには多くの吳語に關する知識と經驗が必要である。まして、外國人である我々にとつてそれが困難であるのはいうまでもない。

その意味でも、今回本書の第二部として、注釋と共に『山歌』の日本語全譯が付されたことの意義は大きい。第一部論考編は、一九九九年に提出された氏の學位論文「馮夢龍『山歌』の研究」を元にしてゐる。そこでは、『山歌』の内容分析に止まらず、編纂の過程や意圖、さらに『山歌』の文學性について當時の文壇の論調をふまえた考察を行っている。それを通じて、なぜ明末にこのような歌謠集が生まれたのか、一つの解答を提示しておられる。これほどまでに總合的に『山歌』をとらえた研究書は初めてである。

なお、大木氏の學位論文「馮夢龍『山歌』の研究」については、インターネット上（東京大學學位論文データベース）で論文の要旨と審査要旨が公開されており、閲覽することができる。

本書は、第一部論考編と、第二部譯注編に分かれる。

序章は、「問題の所在」「山歌」の研究小史」「本論の課題と方法」「山歌」の言語とその研究」の四節に分かれる。ここでは次のような問題提起をしている。

白話で書かれた「説話」や「雜劇」は宋元に既にあったものの、テキストとして確立し定着したのは、明末嘉靖年間から崇禎年間にかけてであつた。著者は、なぜ當時の士人が、庶民のものである通俗文藝に關心を抱き、取り上げようとしたのか、問題提起する。そして、この問題の解決のためには、小説に關與した特定の人物を取り上げ考える方法が最も有効であると述べる。ところが、對象となる「小説に關與した人物」たちは具體的資料が乏しい。そこで、中でも「傳記資料を探りうる希有な人物」である馮夢龍を取り上げるのである。ここに大木氏の馮夢龍研究の意義がある。そして、明末の士人が、なぜ通俗文學に關心を持ち、どのように關わつていたのかという問いに答えるため、士人であつた馮夢龍が集めた「山歌」とは何であり、また彼がいかなる意圖を持つて『山歌』を編纂し刊行する

に至ったのかを考察する。

そもそも『山歌』の原刻本は、一九三四年安徽省歙縣の許甄夏という人物から上海傳經堂書店の主人朱端軒が手に入れた。その後汪雲蓀、鄭振鐸を経て、現在は北京圖書館に所蔵されている。『山歌』発見の翌年、一九三五年には、顧頡剛校點により傳經堂書店から排印本が出版され、胡適、周作人、鄭振鐸、錢南揚らが序を寄せている。これは、俗文學を高く評價する當時の文壇の流れを反映したものであった。顧頡剛は一九三五年の排印本の序文において、『山歌』を反封建的であるという點で評價した。この後、『山歌』は一貫して反封建の書として評價された。大木氏の言をかりれば、中國は、一九四九年から一九八〇年代ごろに至るまで、人民史觀に基づいて文學作品の價值をはかっている。それは五四時期の「民衆」「反封建」の觀點を受け継ぎ、發展させたものであり、『山歌』からはこの「民衆」「反封建」の「ものさしに合う作品」のみが選び出され評價されたという事情がある。これに對して、ドイツのテールマンによる『山歌』研究の書は、作品のモチーフから

の分析であり、大木氏は、それは『山歌』を文人仲間の艶笑歌謠集として捉えているとする。氏は中國での研究は、その文學觀の偏りのために、取り上げる歌が限られ、歌詞だけを偏重して『山歌』全體を捉えていないとする。そして、歌の來歴と歌われた「場」の考察の必要性を主張する。また、テールマンの研究については、一定の評価をしながらも、やはり歌の形式の違いに注意を拂うことと來歴考察の必要性を指摘する。

また『山歌』の言語は、音韻、語彙、語法とすべてが蘇州方言に據っている。馮夢龍が方言に價值を認め、歌を採録するにあたり、口頭の自然の狀態を尊重していたことは、『山歌』中にみられる馮夢龍の評からうかがえる。大木氏は中國文學史における『山歌』の意義は吳語で記されているところにあると述べる。

著者は、序章で検討したこれらの先行する研究をふまえた上で、『山歌』について検討を加える。第一章では四句山歌、第三章では中・長編山歌、第五章で桐城時興歌と、それぞれについて分析検討がなされ、第二章、第四章では、

それぞれの前章で指摘した歌の性格の由來を詳しく考察している。以下、一・二章で述べられる内容をいくつかのポイントに分けて整理しておく。

大木氏は、山歌が歌われていた「場」を「農村」「都市」「妓樓」「文人戯作」の四種に分類する。

今も中國の少數民族には歌の「場」が存在している。歌垣の祭り（男女が相手を見つけるために歌をかわす）において歌われるこれらの歌は、掛け合いの形式を取り、歌詞はしばしば性的な内容である。そのような少數民族が歌う歌は、『山歌』の歌詞にも通じている。元來山歌とは農村の祭りの場で歌われるものであった。ここから、大木氏は『詩經』を想起し、嘗て漢民族にもこのような風習があったが、その後失われてしまったのではないかと推定する。更に、唐宋の文獻から當時長江流域に歌垣的祭りが行われていたことを檢證する。また、『樂府詩集』所收の吳聲歌曲にも、この習俗が關連していたと想定している。また、山歌は、祭りの場だけでなく、農作業の場でも歌われている。著者は、これらの習俗について觸れながら、フィール

ドワークを試み、山間部に殘る民歌「花兒」が歌われる甘肅省康樂縣、農作業の折に山歌が歌われる上海近郊の農村で歌の調査を行った。また、現存する山歌の歌い手から近年採集された歌詞の内容は、馮夢龍『山歌』に通じるものがある。著者は今も歌われるこれらの歌が、馮夢龍『山歌』の卷一から四と重なるのは、馮夢龍が實際に歌を採集していたことの裏付けだとする。

山歌は、當時都市でも歌われており、著者はその記録を明の地方志から丹念に探し出している。それによれば、都市では山歌會が行われていた。行われる時期も、地域によって決まっていたようである。また、それは廟のほか、町はずれの橋で行われ、水路と陸路の交點、農村と都市の境界という意味があったのではないかと著者は推定している。これら山歌會で、農村から都市に流入した労働者（農民たち）と都市の俗曲が接觸していたことが豫想できる。そして、實際馮夢龍と同時代の蘇州でもそのような山歌會はあったに違いなく、蘇州に流入した農村からの労働者達によって、山歌は歌われ、それが都市の風俗を歌い込んでいく

ようになったと述べる。

大木氏の記述から明らかにするのは、「場」が、農村から都市へと移る過程で、歌には新しい要素が付加され、妓楼では俗曲に影響を受けた文人の手による山歌として變化を遂げていった事實である。

大木氏は、これら「場」についての考察から、馮夢龍がどのようにして歌を採集していたかについて推察を試みる。馮夢龍は、歌の「場」に自ら赴き、あるいは居合わせて採集したと思われ、妓楼で流行したものや作者のわかつている「文人の戯作」については、知識人の間のネットワークを通じて廣まっていたものを馮夢龍自身が見聞きし、書きとめた可能性が高いとする。また、今では失われた先行する山歌テキストがあり、それも材料となり得たと述べている。

『山歌』三八六首は、まず卷一から卷九までの蘇州山歌と、卷十の桐城時興歌に分かれる。以下『山歌』十卷の卷名を挙げる。

卷一 私情四句

書評

卷二 私情四句

卷三 私情四句

卷四 私情四句

卷五 雜歌四句

卷六 詠物四句

卷七 私情雜體

卷八 私情長歌

卷九 雜詠長歌

卷十 桐城時興歌

「四句」「雜體」「長歌」とは形式による、「私情」「雜歌」「詠物」とは内容による馮夢龍の分類である。

大木氏は、『山歌』を、その編纂方針と所収の歌のテーマを通して次のように考察する。

配置は、卷一には男女の戀のプロセス、卷二には直接的な性交や身體の描寫、卷三には別れや女性の怨み、といった具合でなされており、それぞれの歌のモチーフ・テーマから、馮夢龍がゆるやかなテーマを設けて編集した。ただし、それは嚴密なものではなく、卷五は「雜歌」「詠物」

が收められ、男色など、内容分類の「私情」の枠に入りきらなかったものも收められる。卷一から四には、大膽で戀に積極的な普通の女性が描かれ、そこには女性の強さ、積極性、潔さがみられ、性交も女性の立場から歌われる。卷六「詠物」に至ると、卷一以降にみられた、積極的女性ではなく、受け身の女性、それも男に捨てられた女の境遇が物に託して、歌われる。卷一の女性一人稱の歌が、積極的でかつ行動的なのに對し、卷六「詠物」の一人稱の歌では、男に捨てられ、物のようにあつかわれる女が描かれ、受け身であるという。著者は、これは従來の詩詞にみられる女性像であり、そこに、文人の關與を豫測している。特に、卷四に至って初めて妓女が登場することに注意し、それ以前に登場する女性は、農村或いは蘇州（都市）の女性たちであると考える。

卷七・九の中・長編山歌については、第四章の「山歌と攤簧」「山歌の歌い手」「農村藝能の都市進出」という三節で論じられる。ここでは、長編山歌は、農村からの山歌が都市化し、都市の音楽の影響を受けながら、文人により戯

作されたと推測している。また、第五章は明末に流行していた安徽の桐城からおこった「桐城時興歌」について分析する。

終章は、「編者馮夢龍と『山歌』の文學」と題し、第一節「馮夢龍の『山歌』編纂作業」、第二節「『山歌』の文學——「眞」をめぐる」の二節からなり、序章での問いに答える。

大木氏は、馮夢龍の『山歌』編集の意圖は何か、という問題に對して次のような主張をする。

著者は、馮夢龍『山歌』の明確な刊行時期を周邊の資料から、萬曆末と推定する。その『山歌』の序文「敘山歌」で、馮夢龍は「三言」のように名を伏せること無く「墨憨齋主人」という自身を特定できる筆名を用いた。大木氏は、その敘には、山歌が現代（明末）の『詩經』『國風』であるという主張と「眞」の主張という二つのポイントがあるとする。敘は、まず、

(A) 「風」——民間性情の響——田夫野豎——山歌

(B) 「雅」——楚騷・唐律——薦紳學士家——詩壇の詩

という對立を明瞭にし、次に

孔子：「桑間濮上」＝馮夢龍：「山歌」

という考えを示す。馮夢龍は「今は末の世で、假の詩文はあつても、假の山歌はない。なぜなら、山歌は詩文と競争しようということがないから、假がないのである。かりそめにも假がないからには、私がこれによつて眞を存するよすがにしようとすることも、可能なのではないだろうか。」という。大木氏は、馮夢龍は（A）を「眞」として評價し、（B）は「假」として非難していると述べる。馮夢龍の「男女の眞情を借りて、名教の僞樂たることを暴く」という言葉は、孔子が『詩經』に「桑間濮上」をも採録していることを自らの『山歌』編纂に重ねた上でのものであり、「當時の詩文を批判する文藝理論の場」からの「薦紳學士」と「名教」への社會批判であつたとする。

また、大木氏は、次のように分析する。『詩經』『國風』が民間歌謠であるという朱子の考え方から、明の李夢陽の「今眞詩は乃ち民間に在り」という語に至る。そこに至つて、『國風』は民間歌謠であるという考えと、『國風』は

眞であるという二つの考えが融合した。著者はここで民間歌謠は眞である、という考えが現れたと述べる。また、當時詩文にたゞさわる者は、流派を越えて、民間で歌われる歌に眞の情の發露を見出し、民間歌謠は眞詩であるという考え方を共通の認識としていた。現實に、今は書物として確認できないが、民間歌謠を收集しようあるいは價值を認めようという動きは複數確認される。著者は、馮夢龍も當然當時のこの考え方をふまえており、後世に民間歌謠を傳えるべく、この『山歌』編纂を志したのではないかと推察する。

なぜ明末という時期にこのような歌謠集が生まれたのかという問いへの解答は、次のようなものである。萬曆ごろの文人達に確かにあつた共通認識「眞詩の追求」が馮夢龍に強く影響し、「眞」を主張する。詩に眞實の感動を呼び戻すためには、「民衆的肉體的感覺」求められたのである。それは嘘偽りのない感情を歌う「あけすけの肉體性」である。明代知識人は、民衆の歌に、自分たちと違つた自由な人間像を發見し、『詩經』『國風』にみられるような理想郷

を見出した。明末には、この民衆に對する思い入れ、「民衆の發見」があつたからこそ、俗文學が評價され、流行した。現實の農村から押し出されてくる勢い（山歌）と、それを受け止める側（知識人）の愛着が一體となつたところに、『山歌』が生まれたのだ。

以上、各章で論じられた問題について整理を試みたが、本書は大部の書であり、評者なりの要約を試みたに過ぎない。以下、個人的にいくつかの氣になつた點について述べたい。

「山歌」という言葉について、本著第二章第二節で、その意味するところを述べておられるが、その廣義狹義の意味がわかりにくかつた。もちろん、読み進むと讀者にはその意味は傳わるにしても、廣義、狹義の意味を初めにそれぞれわかりやすく整理して提示して頂けると讀者にはよりわかりやすかつたであらう。

また、本書では、士人、士大夫、知識人、文人と、おそらく同じ意味で使われる語が何種か用いられているが、そ

れについては何のことわりもなく、意圖的に使い分けているかのような印象を持つてしまう。これについても説明の欲しいところである。

また、本書では、馮夢龍の『山歌』に對する態度については論じられたが、さらに出版史の中で『山歌』という書物の持つ意義に分析が加えられてもよかつたのではなからうか。

馮夢龍にとって『山歌』はその文學活動全體から見てどのような意義があり、他の編集物と比べてどのような位置づけがされているのか、という問いについては、本書では觸れられていない。しかし、本書の基礎となつた、『馮夢龍『山歌』の研究』（『東洋文化研究所紀要』第百五冊、一九八八年）において、同じく馮夢龍の編纂とされる「三言」と對照的にとらえ、その答えを出しておられる。そこ（第三章四節「馮夢龍における『山歌』の位置づけ」）では、『山歌』と「三言」それぞれに對する馮夢龍の態度は違つており、前者は知識人を、後者はより廣い讀者層を対象としているところに原因があるとする。本の性格として、前者は民間

のものをとりあげ提供し、後者は教戒の意味を持つと述べる。また、前者は明末の一知識人として閉塞した時代を打ち破ろうとする氣持ちがあり、後者には世間の亂れを憂い教化意識を持つとしている。この部分は、本書には収録されていない。さらに、馮夢龍と出版業との深い関わりは周知の事實である。馮夢龍は『山歌』以外にも、ある特定のテーマで材料を収集し、分類し、出版するという行爲をしている（例えば『笑府』『智囊』『情史』など枚舉にいとまがない）。『山歌』出版もそれらの流れの中に位置づけられないだろうか。「三言」や、馮夢龍と出版について論及するとは決して脇道に逸れることにはなるまい。馮夢龍が編集に関わったであろう他の書物との関わりについて、著者の意見をもっとお聞きしたかった。また、『山歌』は天下の孤本であり、版本云々を論じられる状態にはない。現在影印本が簡単に見られるが、とはいえ、現物を簡単にみることのできない状況下においては、實際に手に取って得られる情報、紙や刷りの状態など、それを同時代の商業出版の本との比較をした上で何か有れば記して欲しかった。無論、

書 評

『山歌』の書誌的な情報は、本書九頁に記されているのであるが。

このように考えてみると、商業出版としての『山歌』が現實にはいったい誰を対象に出されたもので、その實際の受容者は誰だったのか、この書物がどう讀まれていたのか興味がいってくる。大木氏は『山歌』所収の歌は、馮夢龍が、積極的に民間歌謡へ關心を持ち、自ら採集し、妓樓などで書き留め、あるいは、すでに出版されたものに注意を拂って収集出版したものとする。しかし、受容する側が、民間歌謡、それも蘇州の言葉のままに文字化したものを實際にどのような目的で購入していたのか、その具體的な用途を知りたくなった。著者は卷十「桐城時興歌」について、當時の徽州商人の購買力への期待もあり、『山歌』に収めたのかもしれないと推測し、これは『山歌』が安徽省から發見されたことから納得しやすいとする。そうだとすると、蘇州の妓樓に出入りして山歌に接した徽州商人を始めとする客商が、歌詞を讀んでその内容を楽しむために買い求めたのだろう。歌詞が文字として記録されることによつ

て、吳語を解さない人も（その理解が吳語圏の人に比べて不十分であつたとしても）、『山歌』を読むことが可能になり、より廣い受容層が出現したことが豫測されはしまいか。また、明末の『山歌』を受容した者達に、現在の我々（或いは序章で觸れられていた五四時期の知識人）のような價值觀があつたとは思えない。大木氏の述べるように、馮夢龍には『詩經』の采詩にならう意圖があつて『山歌』を出版したとしても、實際に受容する側の意識とはずれがあり、違つた受け止められ方をしていたとも考えられよう。

受容する側の意識を探る爲には、文人達の残した記録を見るよりほか無い。文人達の間での廣まりについて、著者は同時代以降の小説や戯曲の中にみられる山歌について觸れておられる。第二章第四節「妓樓の歌」で、山歌を引用している例が擧がつている。例えば、馮夢龍自身の戯曲『雙雄記』第六節、「三言」の『古今小説』卷十二、同卷二十一、『警世通言』卷十二がそれである。また、西湖漁隱老人『歡喜冤家』第八回「鐵念三激怒誅淫婦」では、明らかに馮夢龍『山歌』を見てそれを用いた例があることを

指摘している。この不義密通をテーマとする物語がそれを用いることは、『山歌』の受け止められ方の一つの方向を示しているといえよう。本書では、『山歌』の影響をうかがいしる好資料であるとともに、こうした作品が多く作られた明末の時代相をもうかがうことができよう」と述べるに留まっているが、引用している作品の内容にさらに踏み込んだ考察を行えば、受容のされ方がより明確になると思われる。元來『山歌』の内容が非常に性的なものであることも見逃せない。讀んでにやりとするような、卑俗な目的での購入も考えられる。そうであるからこそ、この本は消費され後世に残らなかつたのである。本書ではあまり觸れられなかつた、同じく馮夢龍の編纂である俗曲集『掛枝兒』（これについては大木氏に論文がある。「俗曲集『掛枝兒』について—馮夢龍『山歌』の研究・補説『東洋文化研究所紀要』第百七冊、一九八八年）が相當の流行を確認できるのであるから、この問題を考える際の助けとなるだろう。

また、第一章第七節で、馮夢龍の編纂上の工夫として、歌の配列の「對」について觸れている。大木氏は、テーベ

ルマンがこの點について、「すべての見方の相對性」を指摘していることに觸れ、續いて「馮夢龍は、ある一つの見方に固執することの危険をわきまえており、物事を多角的に觀察する柔軟性を持っていた。對による歌の配列の工夫は、そういった馮夢龍の物の見方をよくあらわしている。」と、述べておられる。この問題については、本書序章で、

「『三言』でも配列への工夫が見られることが指摘され、馮夢龍が『山歌』でも同様の配慮をし、配列を工夫することは當然豫想できる、とも述べられる。評者は、『三言』や『山歌』の配列の工夫が、編算者の多角的なものの見方をあらわすという考えを否定するものではない。しかし、そのような配列が馮夢龍獨特で特有のものだったかについては、さらに範圍を廣げて議論を深める必要があると考える。

本書では、『山歌』の中の女性像も重要な論點である。

特に、積極的な女性一人稱と受け身な女性一人稱の歌があることに注目し、この違いを、歌われた「場」から解釋しておられた。そして、卷一から卷四は、農村や蘇州の普通の女性達が描かれているとされるが、それならば『山歌』

は女性の實際の生活や考えを知る数少ない資料という性格も持つことになるだろう。大木氏は、歌詞には常に「夫の目、親の目、世間の目」といった道德秩序が存在していると述べる。さらに推測を進めれば、當時の現實の社會には士大夫階級の道德的價值觀と違つた價值感も存在していた。文字化されなかつたため今まで知ることのできなかつた中國の多様な價值觀を知る手がかりを『山歌』が提供していることになるのだ。

最後に、言語の問題に觸れたい。序章第四節「『山歌』の言語とその研究」で、『山歌』の吳語資料としての意義を述べ、馮夢龍が音を方言に従つて記録していることを指摘、「方言の價値の主張」があるとする。『山歌』の全文の日本語譯は、文學研究だけでなく、語學研究、民俗學研究など多くの分野に恩恵をもたらす。『山歌』全譯は、おそらくこれが決定版ではない。これを機會に、明末の吳語、及び近世語の研究により、殘された疑問點について、考察が一層深められることを期待したい。譯注について、ここでは詳しく述べることができない。ただ、一つ用字につ

いて指摘しておきたい。影印本と本書第二部の歌詞を比較すると、文字が變えられていることに氣づく。例えば、「并」は「並」に、また「裡」を「裏」に、「窓」を「窗」に、「來」を「來」にといった具合である。民間の通俗出版の字體は、それ自體が多くの情報を擔うことがある。従つて、用字には細心の注意を拂う必要がある。本書のテキストは、凡例によれば「原刻本を底本とし、各種排印本を參照して、本文の文字を定めた」とあり、「最も多く依據」したのは「關德棟校點本（『山歌』明清民歌時調叢書 中華書局 一九六二年）」であるという。關德棟校點本と本書を比べると、なるほど字は一致する。しかし、原刻本の影印本を見ることが出来る以上、活字におこす際は、その字がたとえ異體字であり解釋に影響が無くとも、たとえば「來」をわざわざ「來」に變える必要はないだろう。同じく本書テキスト中の「裏」は原刻本は「裡」だけでなく「裏」と表記している部分もある。表記を統一してしまうと本來の姿形が傳わらなくなるので、むしろそのままの方がよかつたのではないか。

いずれにしても、本書が我々に與えた刺激は、多方面にわたる。本書の『山歌』研究からは、明末中國の人の動きに伴つた農村と都市の文化の融合の様もみて取れた。それは明末の俗文學研究にとどまらず、我々が既に觸れることのできない記録されなかつた文化までを考えさせる力をもっているといえよう。ここから出發し、新たな何かを探り當てられそうな、魅力的な研究書であることは間違いない。今回、我々に『山歌』全譯と、これまで記録に残されなかつたために氣付くことができなかった多くの問題について、示唆に富む論考が提供された。現段階ではまだ推測に止まらざるを得ない多くの問題の研究が深められていくことにより、本書の意義は改めて認められることになるだろう。

（勁草書房、二〇〇三年三月、本文・『山歌』文獻目錄八〇八頁、人名索引・書名索引・英文要旨・中文要旨、十六頁）